

大沼法龍著

先輪

敬行寺光輪会本部發行

目次

13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
私の教化の定規	東本願寺総長と対談	布 哇 着	特派の交渉	大 沼 の 奴	林一夫氏に答う	第一席当選	体験を語る	布教大会になる迄(三)	布教大会になる迄(二)	布教大会になる迄(一)	現生十種益	横綱になる迄
.....
一四〇	一二七	一〇六	一〇〇	九四	七二	六八	四一	三六	三三	二九	一九	五

28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14

三願轉入	唯說彌陀本願海	法龍の使命	成就德器	往還二廻向	眞俗二諦	信樂開發	念々稱名常懺悔	信機信法	罪惡觀無常觀	破闇滿願	唯除と若不	信心歡喜	光壽二無量	南無阿彌陀佛
一九六	一九〇	一八七	一八〇	一七八	一七五	一七一	一六七	一六四	一五九	一五七	一五二	一四八	一四六	一四一

は し が 心

南無阿彌陀佛

若我成佛十方衆生稱我名号下至十声若不生者不取

正覚彼佛今現在成佛当知本誓重願不虛法龍稱念必得往生、何と尊いではないか、身も心も南無阿彌陀佛、現在でこんな尊い廣い苦拔けされた境地が有るとは。拜む手も稱うる口も思う心も南無阿彌陀佛、死後の五十二段は佛力不思議だから行つて見なければ判らない。死んだ世話まで焼かないでも今救われて今満足し切つて生死の苦海の儘が光明の廣海とさされて居る事が有難いではないか、勿体ないではないか。多くの方々は何をのんびりして居るのだらう、何を呉図くして居るのだらう。何で死後の往生を夢見て居るのだ。現在の一息が無量永劫の連鎖ではないか。何故現在を抜きにして死後の華を眺めて居るのだ。余りにも往生浄土の名に執られて平生業成、現生不退の實地問題がお留守に成ては居ないか。願行具足、機法一体に十劫の昔に正覚は成就してあつても、機受の信相がお留守になつては自分の往生の解決に

はならないではないか。晴れたかい、満足出来たかい。三千世界の果報者になれたかい。凡夫がそんなにはつきりするものかいと思われるかも知れないが、晴れられない人が有る以上は晴れられた人が有る事を知らなければならぬ。どうも有る人が有る以上は満足の出来た人が有る事を知らなくてはならない。佛智満入と言つて居るではないか、心得開明と言つて居るではないか、信樂開発と言つて居るではないか、佛智が満入して晴れたか暮れたか判らない人が居るか、心得開明してこれでよいだろうかの不安が有つてたまるか。信樂開発して機を見れば手間が掛ると馬鹿らしい事が言えるか。この機を満足さす爲の法ではないか。この苦惱を除く爲の本願ではないか。このはつきりしない心を断除する爲の妙法ではないか。このどうもなられん心を日本晴さす爲の深法ではないか。この実機を離れて何処に眞実の法が生きるのだ。

いくら薬の効能書を並べて有難がつても飲まなければ全快しないぞ。全快したのなら健康体に成つて生々として活動しなくてはならないのだ。いくら彌陀の本願の御苦

勞を並べて有難がつて見た処で、この世ではどうもなれないのだ、死んだらお助けでは観念の遊戯に過ぎないのだ。此世ではどうもなれないが死にさえすれば五十二段と慶べと教えて居るが因果の矛盾して居る事も甚だしいではないか。此の世でどうも成れない者が死んでどうなれるのだ。―そこが佛力不思議。とぼけるな！死んで佛力不思議が出る位なら生きて居る間に何故佛力不思議が出ないのだ。今晴れて今満足出来るからこそ平生業成とも即得往生とも言うのではないか。それなればこそ稱名に破満の徳が有ると言えるのではないか。どうも成れないからみ佛様のお手元に願行を具足して衆生に廻施して下さるのではないか。それなら廻施して貰つたか。貰つたのなら三千世界の果報者で大満足が出来るのだ。大満足が出来たか。―そんなにはつきりした事はない。ない筈よ、貰つて居ないのだから。死んでから〜と肉体の往生に心を奪われて現生不退に成つて居ないから晴れた天地が味わえないのだ。鏡に向えば姿は見えるのだ、法に向えば機は照し出さるるのだ。鏡を見よ、姿を見るなどは馬鹿

の言つて居る言葉だ。法に向け、機を見ると手間が掛るとは阿呆の寝言だ。照し出された自分の姿を見よ。月の光で月が見え、同時に月の光で万物が見えるのだ。法の力で法が見え、同時に法の方で万象が見えるのだ。己の心身がなければ阿呆の不拔けに月も万物もないのだ。心外に別法はないのだ。この阿呆の不拔けの逆誘の屍に佛智が満入すれば、無明の闇は晴れて十方法界の因果の理法が正しく見えるのだ。実機が見せつけられるから懺悔となり、攝取されたから歡喜となり、この懺悔が俗諦門となり、この歡喜が眞諦門となるのだ。眞宗の道俗よ、自惚れるな、自己の姿を照されて見よ、それでも人間の所作と自惚て居るのかい。まるで愛慾の俘虜となり、名利の化物になつて居るではないか。それでも僧侶か、人の上に立つてる資格が有るか。それでも同行か、お念佛稱えて誤魔化すな。

1 横綱に成るまで

昭和二十四年九月三原市の杉原同行より「唯今文化時報の主催で東西本願寺の布教使の番附目録が出て居ますが、和上様が前頭に居らるので、私達は上の方に出て貰わねばと思つて同行達がハガキで投票して居ます」と手紙が来た。何を言つて居るのだ、と一笑に附して居た。會々上京の時浜上佛具店で文化時報を見た。成程優秀な布教使が轡を並べて出て居る。一晚中考えた。揚子江を見物して居る支那の王様が家來に向つて、毎日この江を上り下りする舟は何艘位居るだろうか。はい二艘で御座います。何を馬鹿な事を言つて居る、見えるだけでも何百艘居るか判らないではないか。いや名利の二艘で、名譽を得る爲か、利益を得る爲に動いて居るだけで御座います。成程。母は私の幼少の時、温々と炬燵で寝て居る時、震えながら母が入つて來たので眼が覺めて、お母さん頭に雪が降つているが、家に降り込んだのか。眼が覺めたのかお前は小さいから知るまいが、今頃は御開山様の御正忌報恩講とて何處の寺でも

勤まつて居るが、お父さんは布哇に行つて居らるるからお留守、兄さんと二人残して参詣すれば炬燵をかやして火事を起せば村の方々に迷惑を掛けるから出られない。それかと言つて聖人様の御苦勞を思えばじつとして居られないから裏の橙畑の雪の中に坐つて今迄お稱名を稱えて居た。お前は大きくなつたら眞の坊さんに成つてお吳よ、名誉や利益を望んではいけない。墨の法衣に墨の袈裟で草鞋の儘で國々を布教して下さいよ。頭を撫ながら寝物語りをして下さつたが、自分が大学の研究科を卒業してから見すばらしい妻をして居ては人が乞食坊主として相手にしないから法話しても受け付けまい。水は下から上には流れぬもの、出来るだけ出世しなさい。法の爲に使う金なら儲けなさい。何時も寄附して下さいと頭を下げて居ては人が法を聞かぬから自分の身の廻りや子供の教育は門徒に迷惑掛けぬよう自分でしなさい。心だけは聖人様の眞意を諦得して眞宗を復興しなさい。それが私のお願いでと言つて居た。

靜かに考えて見ると新聞社は利益、布教使は名譽、誰が名利を離れて仕事をし得る者が居るだろう。釋尊は人間の本能を五欲と説かれた。五欲を離れたら人間はないのだ。而しこれに耽溺すれば流轉を重ね、これを淨化すれば白蓮華となるのだ。聖人様の御精神の絶対他力、唯信独達の眞理には変りはないが教化の仕方、生活の様式も変らなければならぬ。このスピード時代に草鞋掛けでは珍現象だ。反対の立場に居る者は何をして悪口を言うのだ。言う者は行う者ではない、行う者は言わないのだ。世間では自分の事を異安心の張本人のように言つて居る。言われるのも無理はない、死後の往生を語つて居る中に現生不退を説き、どうも成れない儘と言つてる中にかどうか成れるから聞けと教え、凡夫はこれでよいと言ふ事は無いと説く中に大満足の境地が有るから進めと激励して居るのだから反対も反対、まるで方角が違ふのだから彼等から言えば異安心の親玉に違ひないが、俺から見れば無安心の親玉に見えるのだからお前達と一緒であつたら大怪我をすると哀れに思つて居る。

この番附は文化時報社が主催で十年目毎に行つて居る行事で今年が第三回目だ。よし此際乗出して信仰で雌雄を決しなければならぬ、と思つたから運動を始めた。小結、関脇、大関、横綱と進み、横綱五人の中の第二席に成つた。喧喧噉噉、大関に居る教界の猛者連が批難攻撃だ。言い度いだけ言うがよい、風は吹けども山は動かぬのだ。法の櫻花を眺めて陶醉して居る者に実弾を投げて実機を突けば喫驚驚天をするのは当り前だ。己れの地位がぐらつき、自分の今迄説いた事が嘘になるから同行の帰依を失うから辨護の余り相手を批難攻撃せずには居られないのだ。やるがよい互に鎬を削る所に法門の發揮は有るのだ。自分は宿善が厚いから素直に戴かして貰つて居ると合点して腰掛けて居睡つて居る無安心が一番恐しい。自分は立派な柄ではないけれど横綱二席に当選した。その番附は左の通りである。